北西ヨーロッパ地域研究のための基本文献

＜入門書＞

○近藤和彦編『イギリス史研究入門』山川出版社、2010 年

高度な内容の研究入門書。直ちに通読する必要はないが、第 1 章「総説」と文献紹介に目を通しておくとよい。年表もすぐに活用できる。イギリス史を学ぶ者の必携書。

○川北稔『イギリス近代史講義』講談社現代新書、2010 年

グローバルな視点からイギリス近代史の重要テーマを提示する新書。読みやすい。

○指昭博編『はじめて学ぶイギリスの歴史と文化』ミネルヴァ書房、2012 年

一般的な入門書のイメージにそった内容。充実したコラムなどを通じて、近年の研究成果の一端を知ることもできる。第二次世界大戦後あたりまでが中心。

○井野瀬久美恵編『イギリス文化史』昭和堂、2010 年

近世から現代にいたるイギリス文化の諸相を、さまざまなテーマをとりあげながら、分かりやすく説明している。

○森嶋通夫『サッチャー時代のイギリス』岩波新書、1988 年

サッチャー時代は 20 世紀イギリスの大きな転換点。現代史の一史料として読んでみたい。

○吉田健一『英国に就て』ちくま文庫、1994 年

★図書館では 単行本（1974 年刊行）を所蔵

吉田茂の長男で文芸評論家、小説家、エッセイストだった吉田健一による「英国」論。学術書・研究書とは異なるアプローチで、イギリスのイギリスらしさとは何かを考えさせてくれる。

＜事典＞

『スコットランド文化事典』原書房、2006 年

『イギリス哲学・思想事典』研究者、2007 年

『岩波西洋人名辞典』増補版、岩波書店、1991 年　★図書館では 初刷（1981 年刊行）を所蔵

『英米法辞典』東京大学出版会、1991 年

上記の他は、近藤和彦編『イギリス史研究入門』300 ページを参照のこと。

＜通史・概説書＞

川北稔・木畑洋一編『イギリスの歴史』有斐閣、2000 年

近代史以降に重点を置いたコンパクトな通史。

村岡健次・木畑洋一編『世界歴史大系　イギリス史３』山川出版社、1991 年

政治史を中心とする詳細な近現代史。事実関係の確認など、索引を活用して、参考書として利用するのもよいだろう。なお、近世までの通史は、第１巻、第２巻にまとめられている。

ポール・ラングフォード監修（鶴島博和監訳）『ブリテン諸島の歴史』（全 11 巻）慶應義塾大学出版会、2009 年－

The short Oxford history of the British Isles （2000－08）の翻訳。タイトルが示すように、イングランドを中心とする歴史叙述から脱却し、ブリテン諸島の歴史を統合的に捉えることを目指した通史。他の通史と比較検討しながら読むとよいだろう。

＜研究書＞

リンダ・コリー（川北稔監訳）『イギリス国民の誕生』（名古屋大学出版会、2000 年）

「イギリス人」とは何かという議論を喚起した研究書。イギリスの「連合王国」としての成り立ちがよくわかる。

金澤周作編『海のイギリス史』（昭和道、2013 年）

イギリスは海によって世界と繋がっていた。グローバルな舞台で展開するイギリス史・海事史の魅力を伝えてくれる良書。

勝田俊輔『真夜中の立法者キャプテン・ロック－19 世紀アイルランド農村の反乱と支配』（山川出版社、2009 年）

「キャプテン・ロック」の名のもとに起きた、19 世紀アイルランドの農民反乱を扱った研究書。徹底した史料収集と冷静な史料分析に立脚し、新たな歴史像を提示しようとする研究者の営みを、本書を読み、感じてほしい。

（2013 年 10 月　伊東剛史）